

よい語り わるい語り 「プログラムの作り方 1」

関西のある町の文化ホールから、親子向けのものがたりライブを頼まれた。館の自主事業で来年の秋の日曜日が希望という。

カレンダーを見たらなんの印もなかったので、ありがたくお受けした。固定式階段座席で 250 人定員のコンパクトなホールと言うことで、ステージと客席も近くてよさそうだ。

すると春になって「チラシを作るので当日話す予定の演目を教えてください」とメールが来た。

これが少し困る。

ぼくはいつもステージに立って客層を見、ことば遊びや世間話をして様子をうかがってから「今日はこのへんの話がちょうどいいのかな？」と判断して演目を決めている。

高座に上がる噺家と同じだ。

もちろん、それでもすべるときはすべるのだが、なるべく話はその場の空気を決めたいと思っている。

空気と言うのは、ぼくのそのときの気持ちと調子とお客のかもしだす雰囲気と会場の環境のすべての合計だ。

誤解をおそれずにあえて書くと、お話会と言うのはお話を聞かせる会ではない。

語り手と聞き手がいっしょに、お話を素材にして、楽しい時をすごす会だ。ただ、話を伝えればいいのか「とにかくいい話を覚え、それをまちがえずに語れるのがいい会だ」ということになる。

もちろん、まちがえずに語れた方がいいし、わざわざステージに立つ以上、それは前提だ。

だが、たとえば自分の子どもに語るために前もって練習したり、暗唱する親はいない。そして、ここが大事な点だが、親が子どもと添い寝しながら

「えーと、それでね。なんだっけなー、それからね」と、たどたどしく語ったとしても子どもは文句をつけない。

どうであれ、楽しい時間に決まっている。

なぜなら、自分が好きな人が自分のために時間をさいて、ものがたりを語ってくれるというのが嬉しくてしかたないからだ。

聞き手の側から楽しい時間にしているといってもいい。

どうでも、よい語りになる。

で、ぼくが小学校でもものがたりライブをさせてもらうなら、通常の 45 分の中でまず自己紹介し、簡単なことば遊びやクイズをしながら、自分は子どもたちを観察し、子どもたちにはぼくを観察してもらう。

そして子どもたちに(この人は敵ではなさそうだ。おもしろそうだ。聞いてみよう)という気になってもらうよう、空気作りにつとめる。

なぜなら親は最初から子どもに親近感をもたれているからスーッと入れるが、
そうではないぼくらはスーッと入れないからだ。
噺家だって高座に出ていきなり話には入らない。
必ずマクラをやって場をあたためることから始める。

それは自分が客を見さだめると同時に、客に自分に親近感を持ってもらうまでの
時間稼ぎをしているといってもいい。

で、もう、うちとけてきたかな？となってから、45分の中で通常なら話をふたつする。
たいてい、ひとつめはぼくが住んでいる八ヶ岳を舞台にして新しく作った話。
ふたつめは日本のあまり知られていないけれどおもしろい昔話。
これも一部の噺家のように古典と新作の両方を語りたいと思うから。